

昔むかし、仲のいいふたりの男がいました。あるとき、いっぽうの男が貧乏になつて、あちこちへお金を借りに行きました。けれども、だれも貸してくれませんでした。男は、「そうだ、友だちのところに行つて、六百ターレル貸してくれと頼んでみよう」と思つて、出かけて行きました。

「ねえ、ぼくに、六百ターレル貸してくれないか」

男がたのむと、友だちは、

「いいとも。商売がうまくいったら返してくればいい」といつて、お金をさいふに入れて貸しました。

男は、

（よし、このまま、船に乗つてよその国へ逃げてしまおう）と考えました。そして、港に急ぎましたが、船に乗りこもうとすると、さいふがありません。

ちようどその頃、友だちの家の召し使いが、港でお金の入ったさいふをひろいました。

召し使いは、さいふを主人のところに持つて行きました。

「旦那さま。港でさいふをひろいました。六百ターレル入っています」

主人は、さいふを見て、

「これは、ぼくが友だちに貸してやったものじゃないか」といいました。そして、さいふを手箱の中にしまいました。

しばらくすると、男がやつて来て、

「すまないが、またお金を貸してくれないか」といいました。

「いくらいるんだい」

「三百ターレルほしいんだ」

友だちは、

「いいとも」といつて、三百ターレルをさいふに入れて、男に貸しました。

男は、また、

（よし、このまま、船に乗つてよその国へ逃げてしまおう）と考えました。ところが、船に乗りこもうとしたとき、さいふを海の中に落としてしまいました。

ちようどその頃、友だちの召し使いが海へ漁に出ていました。網を投げると、大きな

魚がかかりました。召し使いが魚を料理しようとすると、魚のお腹から、お金の入ったさいふが出てきました。召し使いは、さいふを主人のところへ持って行きました。

「旦那さま、魚のお腹から、さいふが出てきました。三百ターレル入っています」

主人は、さいふを見て、

「これは、ぼくが友だちに貸してやったものじゃないか」とおどろきました。そして、手箱の中にしまっておきました。

しばらくすると、また男がやって来ました。

「すまないが、こんどは四百ターレル貸してくれないか」

「いいとも。最初が六百ターレル、つぎが三百ターレル。こんどの四百ターレルで、合わせて千三百ターレルだよ」

男は、ちよつとの間考^{あいた}えていましたが、お礼をいって出て行きました。

男は、四百ターレルを持って船に乗り、あちこちの海や陸を商売してまわりました。お金はどんどん増えていきました。

やがて、男は、ふるさとに帰ってきました。そして、友だちのところに行つて、

「ぼくはあのお金を持って、海や陸を商売してまわったんだ。そうしたら、お金がどんどん増えたので、君に借りたお金を返しに来たんだ」といって、千三百ターレルを差し出しました。友だちは、

「じゃあ、商売はうまくいったんだね」といいました。

「そうなんだ」

「それはよかった。でも、君にききたいことがあるんだ。ぼくからお金を借りたとき、君は心の中でどう思ったんだい。正直にいつてくれ」

男は少し考えてからこういいました。

「ぼくは、貧乏になつてお金がなくなつたので、あちこちへお金を借りに行つたんだが、だれも貸してくれなかった。そこで、君のところに来て六百ターレル借りると、これを持って逃げてやれと思つたんだ。そうして港に行つたところが、とちゅうでお金を落としてしまった。それで、また君のところに来て三百ターレル借りたんだ。ぼくはまた、心の中で、これを持って逃げてやれと思つた。ところが、船に足をかけたたん、お金を海に落としてしまったんだ。そこでまた君のところに引き返してきた。そのとき、心の中で、神さまに祈つたんだ。もしまた友だちがお金を貸してくれたら、そのお金が幸

いをもたらすように。どうぞ、わたしが友だちをだますことなく、生きていけるようにとね。そして君が貸してくれた四百ターレルで商売をすると、うまくいって、お金がどんどん増えたんだ。今こうして、借りたお金を返すことができた」

すると、友だちはいいました。
「友よ。君の気持はよくわかった。では、君のお金は君に返そう。四百ターレルはぼくがもちが、九百ターレルは、君のものだ」
男が、おどろいて、

「え、どうして」とたずねると、友だちは、笑って、
「ぼくの九百ターレルは、もう返してもらった。これは君のお金だよ」といって、これまでのことを残らず話したとき。

村上郁再話

資料『世界の民話1 アフリカの民話』山室静編訳／未来社